

アジア・オセアニア諸国との連携を展望する-私のサイコドラマ体験から-

その他（別言語等） のタイトル	From the aspect of cooperation with Asia and Oceania : Based on my psychodrama experiences
著者	前田 潤
雑誌名	集団精神療法
巻	34
号	1
ページ	53-58
発行年	2018
URL	http://hdl.handle.net/10258/00010007

特集

アジア・オセアニア諸国との連携を展望する ——私のサイコドラマ体験から——

前田 潤*

Key words

psychodrama, IAGP, Asia, Oceania, cooperation
サイコドラマ、IAGP、アジア・オセアニア諸国、連携

要約

著者は、札幌サイコドラマ研究会でのサイコドラマ体験を通じて、東京からオセアニア、IAGP (International Association of Group Psychotherapy and Group Processes) へと世界が広がり、外国とつながりが広がっていった。IAGPはヨーロッパ・アメリカ中心であり、欧米人の会員や理事が多数を占めるが、会員数の伸び悩みと高齢化が課題となって、アジアに活路を求めようとする。一方、日本心理劇学会も同じ課題に直面しており、資格制度の導入によって活路を見出そうとしている。広くアジアに目を向けるとサイコドラマのニーズは高まっており、アジア・オセアニア諸国と連携を深めていきたい。そのためには、まず少しずつ出来るところから始めることが重要である。

I. はじめに

現在、私はIAGP (International Association of Group Psychotherapy and Group Processes: 国際集団精神療法学会) の理事を務めて2期6年目になるが、IAGPは国際とは言え、つくづくヨーロッパ・アメリカ中心の国際学会であると身に沁みることが多い。例えばRegional Conferenceが中国・北京で2015年に開かれ、それは盛大な学会で多くの中国人が参加したが、その後IAGP学会員になった中国人は一人もいない。それでIAGPの理事会ではあれほど東の遠くまで行って協力したのにメリットがなかった、という意見が交わされる。でも、その遠くの東から毎回のように来ている私は、このIAGPからどういうメリットを得ている

のだろうか?と考えるのである。IAGPの理事のほとんどはヨーロッパ・アメリカ在住である。さらにサイコドラマ部門の理事のほとんどが1993年に設立されたFEPTO (The Federation of European Psychodrama Training Organizations) のメンバーであり、ヨーロッパ内で相互交流を深めている。IAGPの理事はこれに、エジプトや南アフリカが加わり、アジア・オセアニアからは中国、台湾、オーストラリアから一名ずつで、日本は理事が2名になったところである。理事の数だけではなく、会員数から見てもアジア・オセアニアはIAGPではマイノリティである。一方で、JAGPも日本心理劇学会も同様の課題に直面しているが、IAGPは会員数の増加と若い世代の取り込みが課題となっており、アジア・オセアニアに解決の糸口を見出そうと考えている。

私自身はといえば、今は年を重ね50代半ばとなったが、サイコドラマを通じて、最近外国の人との交流が多くなり、今はアジア・オセアニア諸国との連携をもっと深めたいと考えている。その私もかつては若者であった。若かった私が、サイコドラマを通じ、年を重ね、どうしてそのように考えるようになったか。自験例を追うことでアジア・オセアニア諸国との連携の意味について考えてみたい。

II. オセアニア諸国とのつながり

そもそも私が外国人の先生と交流を持つようになったのは、現在の東京サイコドラマ協会(旧東京サイコドラマ研究会)の諸先生によるものである。札幌サイコドラマ研究会(以下、札幌サイコ)が1986年に発足し、1989年から東京から札幌に先生達に来て頂いて本格的なサイコドラマ・ワークショップを体験できるようになった。この体験が若き私を魅了した。先生達は、1981年にモレノショックがあったことを語り、磯田雄二郎先生が師事するオーストラリアのマックス・クレイトンが創始したANZPA (Australia and [Aotearoa]^{註1)} New Zealand Psychodrama Association) の存在を聞いた。札幌サイコの会員から誘われて私は、1991年にメルボルンで開かれた環太平洋国際集団精神療法学会に参加し、初めてマックス・クレイトンのセッションに参加した。丁度、湾岸戦争が勃発し、遠いメルボルンで不安や恐怖を抱く参加者同士で互いのつながりを確認する場面があったことを思い出す。そして札幌サイコの会員の一人が留学したことをきっかけに1996年に札幌にニュージーランドからマックス・クレイトンとクリス・ホスキングを招聘することになった。続いて1997年には1990年から2期に渡ってANZPAの会長を務めたオーストラリアのスー・ダニエルも招聘し、札幌だけでなく私が勤務していた伊達赤十字病院でもサイコドラマのワークショップを開催することになった。以来、札幌では、東京サ

イコの先生達、マックス・クレイトン、スー・ダニエルを定期的に招聘することになり、札幌は日本の中でも良質かつ充実したサイコドラマを体験できる場所となったのである。2000年に日本心理劇学会の学術大会を札幌学院大学で開催した時には、マックスとスーそしてプレイバック・シアターの創始者ジョナサン・フォックスの3人を招聘してプレカンファレンスを実施した。日本心理劇学会にとっても冒険であったと思うが、札幌サイコにとっては大冒険であった。しかし、沢山の参加者があって結果的にとても良い体験となった。

3月はマックス、9月はスーが訪れることが常態化し、マックスもスーも、米子、東京、中部エリア、東北エリアなども縦断し、サイコドラマを普及してくれている。

2013年にマックスが77歳で亡くなる前年の3月にもマックスは札幌に来てくれた。その帰りにマックスは、実は今年もう来れないかと思ってたんだ、と笑顔で言ったのであった。札幌を一望できるバーがあるのでお連れしたいと伝えると、今度ね、と言って、それが今生の別れとなり、叶わぬ約束となった。

札幌サイコは、東京サイコやオセアニア諸国と強いつながりを持っている。それは先生達の未知の地に足を踏み入れる勇気と、サイコドラマの普及に不断の努力を払う態度に負っていると言わざるを得ない。

III. メルボルン・サイコドラマ研究所 (Psychodrama Institute of Melbourne)

実はこのオセアニア諸国も複雑な状況にある。それは、スーがメルボルン・サイコドラマ研究所 (Psychodrama Institute of Melbourne: PIM) を2001年に立ち上げ、ANZPAから独立したためである。PIMはサイコドラマ創始者であるヤコブ・モレノの妻ザーカ・モレノの支援を受け、1974年以前にヤコブ・モレノがビーコンハウスで行っ

From the aspect of cooperation with Asia and Oceania: Based on my psychodrama experiences

* 室蘭工業大学 (〒050-8585 室蘭市水元町27-1)

Jun Maeda: Muroran Institute of Technology, 27-1 Mizumotocho, Muroran, Hokkaido, 050-8585 Japan

ていたトレーニング・プログラムに大きく従うサイコドラマ・トレーニング機関として設立された。IAGPと提携するサイコドラマの国際トレーニング機関であり、スーのほかにザーカ・モレノ、ジョナサン・モレノ、アダム・ブラットナーが指導者となって、これまで多くのサイコドラマティストを輩出してきた²⁾。しかし、オーストラリア国内ではサイコドラマの二分極化が生じ、サイコドラマの導入を図ったマックスにとってスーの研究所の設立は受け入れがたいものだったと想像される。ただ、2人に直接その経緯や思いを聞いたことはこれまでなかった。マックスもスーも札幌サイコに貴重な経験をさせてくれる大切なサイコドラマティストであり、両者の事情に踏み込むのは憚れたのである。

2011年に東日本大震災があり、この年のマックスのサイコドラマ・ワークショップは流れた。私は、日本赤十字社の災害支援活動に携わり、被災地で長く過ごすことになったが、そのときスーからIAGPの理事に推薦するとのメールを受け取った。被災地の壊滅状態に私自身も何とも言えない無力感に苛まれており、自分に務まるかな？という不安よりも何か出来ることがあればという気持ちが優先し、応諾した。そして被災地で選挙の準備を行って応募したところ受かってしまったのである。私がというより、それ以前の小谷英文先生や磯田雄二郎先生への信頼もあり、また日本ということで票が集まったのだと思われる。2012年にコロンビアのカルタヘナで初めてIAGPの理事会に出席し、それ以降2013年にはUSAのニューオリンズそしてイタリアのイセオ、2014年にはポルトガルのリスボン、2015年は中国の北京とクロアチアのロビニ、2016年はスペインのグラナダ、2017年はドイツのベルリンへと赴いてIAGPの理事会に出席を重ねた。そこで集まる理事達はその国を代表する人達であり、翻ると私は何も代表せず、ただの一人の専門家でしかなかった。私の被災地支援での無力感も手伝ったと思うが、少なくとも国際資格を取るべきではないかという気持ちが強くなり、2012年からIAGPの理事

会に赴く一方で、スーのPIMでサイコドラマティストになるためのトレーニング・プログラムに参加することにしたのである。

サイコドラマティストになるには800時間のサイコドラマ体験と100時間以上のスーパービジョンが必要で、次にサイコドラマと自分との関わりについてのエッセイ (Maeda 2017) の提出が義務づけられる。サイコドラマ・アシスタントの資格を取得したのが2013年。次いでサイコドラマティストのキャンディデートとなり、サイコドラマ・ディレクターとしてスーパーバイズを受けながら、今度は科学論文 (Maeda 2015) を提出。先のエッセイもこの論文も英語によって作成せねばならず、科学論文作成では別のスーパーバイザーに指導を受けながら作成した。この論文審査がなんとか通って、サイコドラマティストへのプラクティカムを終えて資格試験を迎えたのは2015年2月のことであった。私が、サイコドラマに触れたのが1986年なので、実に29年かけて資格試験を受けることになったわけである。

資格試験は、まず、1時間半サイコドラマのディレクターを行う。自分でサイコドラマを行うためのグループを組織するのが一般的やり方だが、私の場合は、スーがメンバーに呼びかけてくれ試験官2名以外に6名が参加して実施となった。時間厳守でサイコドラマが途中でも終了となるのだが、時間内になんとかシェアリングまで終えることが出来た。それから30分間かけてディレクターとしてしたことをレポートにまとめ、つぎに30分でそれを皆の前で報告する。それから30分間TEPから口頭試問を受けるのである。

口頭試問の最後に試験官から、あなたが先ほど行ったディレクターに役割として名前を付けるとしたらどのような名前を付けるか？と質問された。能動的で、ポジティブで、などと述べている最中に、この29年という歳月が思い起こされ、はたと長い航海の末にやっと陸地を発見し、今まさに上陸しようとする航海士がイメージされ、'Long Journey Sailor' という単語が強い情緒と共にあふれ出てきたのであった。私は知らずサイコドラマ

という船で航海を始め、長い年月をかけてやっとここまで辿り着くことが出来たのである。こうして、私は、日本だけでなくアジアで初のPIM認定のサイコドラマティストとなり、現在はPIMの認定TEP (Trainer Educator Practitioner) になるべくトレーニングを受けているところである。

PIMにはこの資格を持つものは現在3名しかおらず、もしも私が取得できたら、PIMで4人目、アジア初のTEPとなる。

IV. サイコドラマがつなげていくアジア・オセアニア諸国

2016年1月に私は、故高良聖先生から代役を頼まれ、台湾でサイコドラマをする機会を得た。それまでに2008年の四川大地震後から日中で共同開催しているアジア災害トラウマ研究会で通訳を介したサイコドラマをワンセッションだけ担当したことはあった。しかし台湾では、プレカンファレンスとして3日間、続く学会でもワークショップを行うというロングラン・サイコドラマで、さらにシンポジストもという私には荷の重い役割であった。今もどうして高良先生は私に任せてくれたのだろう、と不思議に思っているが、ともかくもこれが頼念華先生との出会いとなった。彼女は台湾でただ一人のTEPである。そしてこの学会でイギリスのマーシャ・カーブによる300人もの参加者を相手にした素晴らしく、感動的なサイコドラマに参加することも出来た。

台湾のサイコドラマの始まりは、J.L. モレノが亡くなった1974年に、何人かが集まってアダム・ブラットナーの著書の勉強会を始めたことにあるという。この勉強会の参加者の一人が入院患者にサイコドラマを行うようになったり、別の人が大学に勤務するようになったりしてサイコドラマの授業が行われるようになった。そして年に何度か欧米からサイコドラマティストを招くようになって、決定的だったのは1993年からGong Shuが定期的にサイコドラマ・トレーニングを行うようになってからで、ザーカ・モレノも1996年と2000

年に台湾を訪れている。ザーカは参加者に強い印象を与え、頼念華はザーカのもとでTEPの資格を得ている。2010年に台湾サイコドラマ学会が設立され、今日では19名のサイコドラマティストを有する (Lai 2013)。現在、台湾では頼念華が編集者となって、台湾サイコドラマ学会誌が発行されようとしている。台湾は、アジアでサイコドラマが組織的に普及されている第一の国と言えるかもしれない。

2016年にはメルボルン在住でフィリピンのリンドン・メディナとインドのマグダレーナ・ジェヤラスナムがPIMでサイコドラマティストの認定資格を得た。PIMはこれまでオセアニア諸国で50数名のサイコドラマティストを輩出して来たが、日本、フィリピン、インドが加わってきたのである。

2017年3月に私は中国・内モンゴル自治区の内蒙古師範大学、赤峰中学校、赤峰学院で、中国の専門家、一般の人々、高校生、大学生を対象にサイコドラマ・ワークショップを実施する機会を得た (石川・前田 2017)。特に内蒙古師範大学に参加した人々は、医師、心理学専門家、学校の教員、弁護士、警察官、主婦など多様だったが、誰もが積極的にサイコドラマを自分でやってみたいという意欲を持つ人が多くて驚いた。台湾がそうだったように、中国も今や定期的にトレーニングを受ける機会を求めているのである。

中国ではXu YongがIAGPの理事である。ある時に中国でのサイコドラマの実情を尋ねたが、いろんなところで盛んであるとの返答であった。しかし、2015年に第9回環太平洋IAGP学会を北京で開催した時には、第2回中国集団精神療法学会も兼ねていたので、中国集団精神療法学会の発足は2014年と考えられる。そのため中国は、まだ集団精神療法においては揺籃期にあると思われるが、Xuの言辞と差異があり、実態をつかみかねている。

現在、日本心理劇学会でも資格制度を整えて学会の活性化と心理劇の普及を図ろうと計画を進めつつある。私は、中国内モンゴルでの参加者の思

いの熱さに触れ、彼らは定期的なトレーニングとそれに見合う資格制度を求めていると感じた。そして、日本、フィリピン、インドから更に中国に国を広げてPIMの資格認定制度を利用してサイコドラマのアジア・オセアニア諸国の連合体を作ってはどうかと夢想し、そうすると度々それはヨーロッパにおけるFEPTOのような連合体がアジア・オセアニア地域に誕生することになると気づいたのである。

V. サイコドラマ諸国連合の課題

2017年8月にベルリンで行われたIAGPの理事会において、中国のXu Yong、台湾のChun-Ying Chen、日本の西村馨先生と筆者の4人が昼食テーブルを囲み、これからアジアでの交流を深めていこうという話になった。ただ確かに私達はアジア人だが、私以外はバーバルの集団精神療法家であり、しかも共通言語は英語である。現実的にはどこでどのように交流を深めることが出来るのであろう？そして、その意味はどこにあるか？私は、東京でまず開催することを提案したが、それはXuが日本に来たことがない、と言ったためであるが、実際に開催するとしたらどのような手続きが必要であろうか？

会場は確保できる。参加者の案内は、日本語と中国語で作らねばならない。そして集まった4人で日本語と中国語の両方を話せるものはいない。そうするとメールでのやり取りは英語で行わざるを得ない。または日本語—中国語の通訳者を介さねばならない。日本には、中国の留学生が沢山来ているので、通訳をお願いすることはそれほど難しくはない。しかし、これにもしも、フィリピン、インドが加わったならば、英語を使ってやり取りする以外なくなるだろう。すると幾らアジアと言っても、またアジア・オセアニア諸国連合であっても、やはり英語を媒介してやり取りをせざるを得ず、英語を抜きに語れないもどかしさを味わうことは避けられないのである。

VI. 終わりに

ただ考えてみると、サイコドラマの創設者はヨーロッパ・アメリカ人であり、彼らによって開発され発展、普及してきた方法を私自身も享受している。それはサイコドラマが日本人にも効果的で、もちろん中国でも、インドでも、フィリピンでも、とても効果的だからである。人種や国、文化、時代を超えた普遍性がそこにあるとも言える。

新しい世代に加わってもらには、若者に良い体験をしてもらい、魅力を感じてもらい以外ないだろう。すぐに諸国連合ができなくても、私は、日本だけでなく、中国の内モンゴルから普及活動を始めることになった。これを中国全土に広めていきたいと内モンゴルで手伝ってくれた教員は言っている。どうなるかわからないし、私一人で出来るものでもない。呼ぶ側にとっても私にとっても冒険である。しかし、比肩することはできないが、マックスやスーが足を運んでくれたように、私も臆せずいろいろな人の力を借りながらサイコドラマの旅を続けようと思うのである。

著者には開示すべきCOI状態はない。

注1) 旧ANZPA (Australia and New Zealand Psychodrama Association) は、2012年にニュージーランドの国名の変更に伴って現在はAANZPA (Australia and Aotearoa New Zealand Psychodrama Association) と名称が変更になっている。

注2) 今回の特集を執筆するためにスー・ダニエルに直接、設立の経緯を今回尋ね、スー自身から得た回答による。

〈文献〉

石川正人・前田潤 (2017) サイコドラマ普及のための実践活動報告とその課題—中国内モンゴル及びミセス・ジャパンコンテスト例—。第26回日本心理劇学会発表抄録集, 50-51.

Lai, N. H. (2013) Psychodrama in Taiwan: Recent development and history. *The Journal of Psychodrama, Sociometry, and Group Psychotherapy*, 61(1), 51-59.
Maeda, J. (2017) Psychodrama for my Life (in English and

Japanese). *The Mirror, e-Journal*, 9, 19-32.
Maeda, J. (2015) Systemized Psychodrama for trauma and loss and grief: For healing, for supervising and for self-helping group, *The Mirror, e-Journal*, 4, 67-82.

ABSTRACT

From the aspect of cooperation with Asia and Oceania: Based on my psychodrama experiences

Jun Maeda*

Key words: psychodrama, IAGP, Asia, Oceania, cooperation

The author has been expanding his world from Sapporo and Tokyo to Oceania and IAGP through his experience of psychodrama in Sapporo Psychodrama Study Group. IAGP is active mainly in Europe and America and majority of membership and boards are from these areas. However, IAGP is facing serious problems of lack of number of members and aging of members. IAGP is willing to find a way to solve these problems by welcoming more Asian and Oceanian members and boards. On the other hand, Japan Psychodrama Association (JAP) is also facing same problem and JPA would like to find a solution by introducing a certification system. In Asian area, demands for psychodrama are increasing and now it is a time to enhance cooperation with Asian and Oceanian countries. For this enhancement, it is important to begin with something possible step by step.

Japanese Journal of Group Psychotherapy 34: 53-58, 2018

* Muroran Institute of Technology